

人と業績の値段

大 杉 至*

【要 旨】 人格を貨幣に換算することには大きな抵抗が存在する。まず、そうなった歴史的理由はジンメルの理論から考察する。そこでは、人格が次第に個性的なものと考えられるようになり、逆に貨幣がその個性を失い量的な存在となっていくという歴史的経緯がポイントとなる。次に、労働力としての人の値段をマルクスの視点から考察する。労働価値説は労働者一般の値段の説明としては有効であるが、多額の貨幣に値すると考えられる著名な芸術家等の値段にもそのまま適用するには無理があることが示唆される。最後に、個人の業績が合理的に計算され、そのことから個人が多額の貨幣を手に入れることが可能になった現代の状況を考察する。

【キーワード】 貨幣 労働力 業績

はじめに

人の価値を貨幣に換算することにはかなりの抵抗を伴うのが普通である。少なくとも建前においては「人の命は地球よりも重い」といわれるように、人（の存在価値）は質的なものの典型である。他方で、貨幣は質的に異なるもの同士をスムーズに交換可能にする媒体である。どのようなものをも貨幣量の大きさで表すことをその使命としているという意味において、貨幣は量的なものの典型である。したがって、質的なものの典型である人と量的なものの典型である貨幣は、お互い相容れない存在であるといえることができる。

しかし、例えばインターネットで検索してみると、「あなたの値段鑑定します」といった内容のサイトが多数あり、質問に回答していくと、どのような計算方式が設定されているのかはよく分からないが、「あなたの値段」ばかりでなく、その内訳である「心の値段」、「才能の値段」、「人徳の値段」等が金額で算出されて表示される。これは「遊び」であるといってしまうまでもであるが、現代（日本）人において人と貨幣との関係に変容が生じ始めていることの表れであるとみることが出来る。少なくとも、人の価値を貨幣量で置き換えることに現代の日本人は違和感を抱かなくなってきたのではあるまいか。

最も質的なものである人（の存在価値）は、量的になものに還元されることを拒否してきたけれど、多様な事物をその量に還元することを本質とする貨幣は、その権能を強化してきた。とすると、さきほど人格と貨幣とは相容れない存在であると述べたが、貨幣の権能がある限界

平成 18 年 5 月 31 日受理

*おおすぎ・いたる 大分大学教育福祉科学部社会学教室

を超えれば、それが人格をもその溶解炉の中に取り込んでいくことになる。そして、そのことが現在の社会の中で進行しているといえるのではあるまいか。

そこで小論では、人の存在と貨幣との関係をいくつかのレベルに分けて検討していきたい。

1 人格と貨幣—ジンメルの視点から—

貨幣に関する社会学の古典的な理論の代表は G.ジンメルの『貨幣の哲学^①』であることは多くの人が認めるところである。同書のなかでジンメルは、貨幣と社会との関係を豊富な歴史的事象を踏まえ多面的に分析している。そして、その第五章「個人的な価値の貨幣等価物」において、人間の価値が貨幣によって測られる面を検討している。本章では、ジンメルの分析をたどりながら、今日のわれわれに起こっている事態を究明する上で参考になると思われる部分に光を当てていきたい。

ジンメルはまず、人が貨幣量によって表される事態として、殺人賠償金の問題から考察している。古代においては、人を殺害した場合には殺人賠償金が支払われる場合がしばしば存在したとジンメルはいう。その理由は、その人が死んでしまったことによる経済的な損失を補償するとか、賠償金を支払うことによって復讐を回避するといった功利主義的なものである。しかし、一定の身分の者を殺害した場合にはかくかくの金額を支払わなければならないという金額が定まってくると、殺された者の個人的な相違への無関心が生じ始め、(その身分の)人間一般の価値が一定の貨幣量に相当するとみなされるようになっていく。

一方で、殺人賠償金の理念を否定する事態が進展していく。すなわち、人間の価値は量的な基準では測ることはできないとする理念の発生と浸透である。ジンメルはこれを「人間価値の先鋭化」(A: 394 頁)と表現している。ジンメルによれば、この事態の原因は「生命価値のキリスト教的発展」にある。人間の文化の特徴は、対象を無媒介的に欲求する「因果的・衝動的(kausal-triebhaft)」過程(A: 205 頁)を脱し、人間と対象との間にそれらを媒介する「手段」を挿入していくところにある。文化段階が発展すると、媒介する手段の連鎖はより複雑となる。図式的に表すと、〈主体→手段1→手段2→…→手段n→目的〉となる。しかし、この場合、手段2は手段1の目的であるとも考えられるし、手段3は手段2の目的であるとも考えられる。こうして一般に手段n+1は手段nの目的であるとみなすことができる。このような目的の先送りともいえる事態は、絶対的な究極目的への問いを生み出す。そしてキリスト教の究極目的は神であるから、「キリスト教が人間の魂を神の恩寵の容器として説明したことによって、魂は世俗的なすべての規準にとって通訳できなくなり」(A: 396 頁)、人格は貨幣量で測られることを拒否する事態に至ったのである。

人格と貨幣との関係のこうした推移は、両者の意味が変化してきたことを意味しているとジンメルはいう。「…貨幣は、人間の生命のような比類のない客体の満足すべき補償として役立つのに適した。人間の文化の進歩と貨幣の無差別性の同じ進歩とがたがいに出会い、殺人や重い違反一般の貨幣による贖罪を不可能にした」(A: 401 頁～402 頁)。すなわち、歴史の初期の段階においては、貨幣は一般的に流通しておらず、固有の社会的意味を有していた。他方で、人格は集団の中に埋没し、「何物にも代え難い自己」という感覚は希薄であった。このような段階においては、人格が貨幣によって表されることを容易にしたのである。

時代が進んでいくと、人格と貨幣とは正反対の性質を帯びるようになる。人格が「神の恩寵の容器」として究極的な価値を有するようになったことは前述したとおりである。一方の貨幣は、貨幣経済の進展によって他の事物との交換可能性という能力を増大させ、そのことによって貨幣自身は無色・無性格という性質を増大させていく^②。このように、貨幣の概念と人間の概念とは、たがいに正反対の方向に発展したこと（A：403頁）により、人格を貨幣量で測ることが不適切と考えられるようになったとジンメルはいうのである。

では、現代では人間の価値が貨幣量で表されることに違和感が少なくなっているのではないかという本稿の問いはどう考えることができるのであろうか。この問いへの示唆はジンメルの中にあるが、それは第3章で検討することとする。

2 人の値段—マルクスの視点から—

第1章では一般的な人格と貨幣との関係の変遷をジンメルにしたがって考察したが、われわれが日常において受け取るサラリーは何よりも労働（力）の対価であると感じられる。このメカニズムはK. マルクスの『資本論^③』において詳細に検討されている。

マルクスにとって資本主義社会とは、あらゆるものが商品として現れる社会である。以前には商品ではなかったもの、たとえば水や場合によっては空気までもが商品として登場することにわれわれはすでに驚くものではないが、労働力が商品として登場するところに資本主義的生産の本質がある。労働力とは、「人間の肉体、生きた人格性のうちに実存していて、かれがなんらかの種類の使用価値を生産するたびごとに運動させる、肉体的および精神的諸能力の総体」（B：I a286頁）、すなわち、労働することを可能とする潜在的能力である。これは労働、すなわち労働力の現実の行使と区別されなければならない。商品としての労働力とその行使としての労働との関係は、たとえば食べれば甘いという砂糖の有している性質と現実には砂糖を食べることとの関係と同じである。

しかし、商品としての労働力は他の商品にない特殊性を有している。「その使用価値そのものが価値の源泉であるという独特な性質」（B：I a285頁）がそれである。市場で自由で対等な人間として現れた資本家と労働者は商品の交換を行う。すなわち、貨幣と労働力とを交換する。資本家は労働力をその価値通りに買うので、ここには何の不正義も不平等も存在しない。そして、資本家が購入した商品（労働力）を使用する過程において、労働は自らの価値（労働力の価値）以上の商品を生産するのである。マルクスはここに資本の価値増殖過程のメカニズムを見いだすのであるが、この先は本稿の課題を超えたものである。

さて、商品の値段は何によって決まるのであろうか。商品 A = 商品 B という関係で考察してみよう^④。等号で結ぶことができるということは両者の価値が等しいということである。ただし、20 エルのリンネルと1着の上着では見た目もそれぞれの使用目的も異なっているように、商品 A と商品 B の使用価値は異なる。では、使用価値と区別される「価値」とはなにか。

リンネルを作り出すためには織布労働が必要であるし、上着を作り出すためには裁縫労働が必要である。使用価値としてのリンネルには織布労働が対応し、使用価値としての上着には裁縫労働が対応しているのである。もちろん、織布労働と裁縫労働とは異なる労働である。しかし、二つに共通しているのは、人間にとっての有用物を作り出すために精神的・肉体的エネルギー

ギーを費やして労働したということである。マルクスは使用価値に対応する労働を「具体的有用的労働」、「価値」に対応する労働を「抽象的人間的労働」として区別する^⑤。こうして、商品の「価値」の大きさは、その商品を作り出すために投入された抽象的人間的労働によって決定されるというのがマルクスの立場である^⑥。かくして、商品 A = 商品 B という等式が成り立つという場合、商品 A に投入された労働量と商品 B に投入された労働量が等しいということの意味するのである。

さて、マルクスによれば労働力が商品として現れるのが資本主義社会の特徴であった。したがって、労働力の値段も商品の値段一般の規定を免れることはできない。すなわち、労働力（という使用価値）の生産に必要な労働時間がその価値を規定することになる。一般の商品の場合は、その生産に投入された労働時間、たとえば半日分の労働時間の価値がその商品の価値となる。しかし、食べたときにおいしくて栄養があるといったリンゴの使用価値が、「おいしそうだ」という見た目に現れる使用価値の潜在性から買われるように、潜在的なエネルギーとしての労働力は、目に見える形としては、元気そうで毎日の労働に耐えうる一人の人間として購入される。そうした人間が日々再生産されること、すなわち元気で毎日働けることが労働力の生産に他ならない。ということは、個々の労働力の所有者すなわち（潜在的な）労働者の立場からすると、一定の住居に住み、人並みの衣服を身にまとい、次の日も働けるだけの食料を摂取し…ということになる。次の世代としての労働者も育たなければならないから、ここでは子供の養育費等も必要であろう。このような住居、衣服、食料等は他の人間の労働によって生み出された商品として購入されたものであろう。つまりここから、労働者の日々の生活に必要な諸生活手段の値段が労働力の値段を規定する。これが労働力の値段に関するマルクスの視点の基本（基準）であり、その周りにいくつかのバリエーションが存在する。

まず、労働者諸個人が有する労働力は一様ではない。力の強い者、弱い者が存在する。また、手先が器用な者もいれば不器用な者もいる。いずれの場合でも出来高賃金制度のもとでは、前者はより多くの賃金を得ることができ、後者はより少ない賃金を得ることしかできないであろう。しかし、こうした賃金の多寡は平均的な賃金を基準にした上での話であるから、労働力の平均的な値段はあくまでも平均的な労働力の再生産に必要な値段である。

また、医者や弁護士の仕事には労働者一般の賃金より相当多くの賃金が支払われるのが普通である。これはどのように解釈できるであろうか。マルクスによれば、労働力の値段は生きていくために必要な諸商品の値段であると同時に、その労働力を獲得するために投入された他者の労働によっても規定される。すなわち、医者や弁護士になるためには、学業成績の競争に勝ち抜くためにより多くの教育費が投入されている。これはかれが医者や弁護士になる過程において、一般の人が一般の労働者になる以上の他者の労働が投入されているということである。また、それらの職業への就業年齢も他の一般的な職業へのそれと比べると遅いのが普通である。こうしたことがかれらの労働力の値段を平均以上に押し上げているととらえることができるのである^⑦。

だが、すべての労働力の値段はそこに投入された過去の労働量によってのみ規定されているのだろうか。この点を考えるために、ここでわれわれは金の価値と値段について考察したい。金の使用価値は、装飾品のための素材であったり虫歯の充填のためであったりする。もちろん、食用にできるわけではないし、防寒のための優れた素材でもない。このように、金は生活に不可欠のものではないが、生活に不可欠なもの以上の価値を有している。なぜ金は高い価値を有

しているのであろうか。労働価値説の立場に立つマルクスによれば、その理由はもちろん金には多大の労働が投入されているからである。「金自身の価値は、その生産のために必要とされる労働時間によって規定され、等量の労働時間が凝固した、他の各商品の分量で表現される[®]」(B: I a156 頁)。たしかに一般に金は地中深くから採掘されるので多大の労働を必要とするといえよう。しかし、金の生産には、金が多くの人々によって欲求されることが前提になっている。だから、多大な労働の投入も行われるのである。

ここで素朴な疑問を提出しよう。たまたま散歩をしていて金の鉱石を発見した場合はどうだろうか。しかも発見した人が鉱石会社の労働者ではなく、失業中の「自由人」であったら。これは一夜にして多大な収入を得ることになる。マルクスは、これは偶然的な現象であり、金という商品の価値の本質を変更するものではないというであろう。しかし、19世紀のアメリカでのゴールドラッシュはよく知られており、そこでは人々が「一攫千金」を夢見て、砂金の採取に没頭した。砂金、すなわち地中深く掘り進まなくても、比較的少量の労働力の投入によって、(運がよければ)多くの貨幣を得ることが可能であったのである。

マルクスあるいは古典派経済学の労働価値説を認めるとしても、それを逸脱する現象をすべて「例外」として排除すると、人間と貨幣をめぐる重要な現象も見逃してしまう危険性があるといわなければならない。このことは労働(力)の値段に関しても当てはまるように思われる。例えばピアノの名手とその演奏によって多大の貨幣を手に入れることができるのは、名手に成長するために労働力の産物である大量の商品の消費が必要であったからであろうか。このあたりの問題は次章のテーマである。

3 業績と人の値段

第1章で述べたように、ジンメルによれば貨幣の概念と人格の概念は正反対の方向に発展し、貨幣で購買されることは人格の零落と感じられることとなった。しかし、ジンメルは「量から質への転化」ともいふべき論理で、事態のさらなる変化を指摘する。すなわち、極めて高い額の貨幣は希少性を有しているが故に、多量の貨幣による人格の購買はその下落を免れさせる、というものである。人格が個性あるものとしてみなされるためには、「十把一絡げ」としてではなく、それぞれの個体が個別に評価されることが前提である。その原型としてジンメルは奴隷の例を挙げる(A: 410 頁)。古代においては男奴隷の場合は同じ年齢であれば決まった値段で取引されたが、女奴隷の場合には個人的な魅力によって値段が変わったという。後者においてこのように個別の個体として評価されることは、個別の女奴隷のなかに希少性という価値を生み出し、その希少性に貨幣の希少性(ここでは多額の金額)が対応することになるのである。

また、売春は人格の中核を貨幣を得るために販売するものであり、一般に人格価値の恐るべき低下をもたらすが、ここにおいてさえ極めて高い価格での身体の販売は、それによって「希少価値」をもたらすとジンメルはいう。これは多額の貨幣を得るという結果が売春という内容から独立した新たな現象を生み出し、高級売春婦に対して一定の尊敬さえ生み出すという例である[®]。

女奴隷や売春婦の世界から、陽の当たる現代の世界に目を転じてみよう。有名なピアニスト

は一回の演奏で多額の金額を稼ぐことができる。奴隷や売春婦とは異なり、かれは人々から真正銘の尊敬を集めている。しかし、それでも演奏によって貨幣を得ることは、個人の業績および人格の一部を貨幣と交換することから生じる「後ろめたさ」を生じさせる。このことをジンメルは、個人的な業績の方に残る「残高(der Saldo)」と表現している。したがって、例えば聴衆の熱狂的な拍手によってこの「残高」は初めて解消される。

多額の貨幣が希少性を生み出し、それが個人(の業績)の希少性に対応することを認めたとして、個人の業績が多額の貨幣を獲得する方法は主として二つの方法がある。一つは、有名な画家が描いた絵画が多額の金額で買われるような場合であり、ここでは例えば大富豪が買い求める。もう一つが、先ほど例に挙げた、聴衆を集めてコンサートを開くピアニストの場合である。これらをそれぞれもう少し詳しく検討してみよう。

第一の画家の場合、かれの絵画(希少な価値)を多額の貨幣(希少な価値)で購入しようとする富豪の存在が前提となる。その絵画の値段はいかに決まるか。おそらく前例であるとか相場であるとかが影響するはずであるが、特定の富豪が特定の絵画を気に入ったのでどうしても手に入れたらいいといった、購入者の恣意性に依存する要素が多いものと思われる。この場合、先ほどの「残高」が残ることは希であろう。なぜなら、この場合販売者も購入者もいずれも希少性という価値を帯びているからである。前者は一般の人がもたない芸術的才能によって、後者は一般の人が持ちえない多額の貨幣によって。

それに対して多くの個人が集まって、特定の芸術的作品を購入しようとするのが、ピアノの演奏を聴くコンサートの例である。個人個人が支払う購入金額はそれほど大きくはないが、それが集合することによって多額の金額(希少性)となるわけである。この場合には、個々の聴衆とピアニストとの関係ではピアニストの方に「残高」が残り、拍手喝采やコンサートが終わった後の花束の贈呈がその残高を解消することになるであろう。

さて、この場合のピアニストの1回のコンサートの値段はいくらであろうか。ここでは先ほどの絵画の場合のように金持ちの気まぐれによって値段が決定されやすいわけではなく、より合理的な計算方法によって金額が決定されることになる。

西村肇の『人の値段—考え方と計算^⑧』はこういった問題を合理的視点から考察している。その中で指揮者の報酬の決定方式が分析されているので、ピアニストに代わって小澤征爾に登場してもらおう。小澤の公演(練習一日、本番一日)の値段は400万円から700万円といわれているそうだ。それを決定する要素は、指揮者の実力と観客を動員できる能力である(C:47頁)。西村によると、指揮者の実力を構成するものは、15の部門・100人からなるオーケストラを統率する能力であり、その源泉は楽団員からの尊敬と信頼である。それらが成立するためには、オーケストラの総譜を完全に暗記していること、楽曲の途中での各部門の出だし(アタック)の正確な指示等が必要である。さらに専門的な面では、指揮者による楽曲の解釈が専門の批評家による評価を決定することとなる。

以上の点を踏まえてではあるが、実際に指揮者の値段を決定するものは指揮者の観客動員力である。小澤が指揮をすとなれば、平均8000円のチケットで2000人のホールを埋め、1600万円の金額を集めることが可能である(C:45頁)。そこから、ホールやオーケストラへの支払、興行主の収入を差し引いても、1回700万円という金額は妥当なものであると西村は結論している^⑨。

年俵で数億円稼ぐ野球選手も珍しくないが、この値段もその手続きが複雑になるだけで指揮

者の値段の計算と基本的には同様に求めることができる。すなわち、年間の入場者収入等から必要経費を差し引き、チームへの貢献度によって各選手への配分額を決定することになる。もちろん、貢献度をどう査定するかには複雑な要因が関係するので、選手に不満が生じることも希ではなく、越年闘争、ストライキ等が発生することもわれわれはよく知っているところである^⑧。

さて、指揮者やスポーツ選手といった一般に「自由人」とみなされやすい職種から、多くの人の雇用形態である「会社員」の値段に目を転じてみよう。数年前に世間の耳目を集めた青色発光ダイオードの発明者、中村修二のケースを前述の西村肇の著書は分析しているのでそれを参考にして検討を進める。

周知のように、2004年1月30日、元社員である中村修二に青色発光ダイオードの基本特許の相当対価として200億円を支払えという判決が日亜化学に下された。これまでの「常識」をこえた金額のため、多くの人の話題となったことは記憶に新しい。話題とはなったが、並はずれた金額から、自分とは関係ない話と多くの人が考え、一過性の話題であったように思われる。実際、この「事件」がどのような結末を迎えたのかについての記憶が定かではない人の方が多いのではあるまいか^⑨。しかし、「会社員」であっても業績によっては多額の貨幣を得ることができるということを世間に知らしめた効果は大きい。

このニュースへの反応を西村が紹介しているので、それに従って整理しよう。

まず、「特許が製品として市場に出るには生産から販売まで多くの社員の努力と資金投入、そして何よりリスクを冒してプロジェクトを遂行する経営者の判断が必要なのに、判決はまったくそういうことを理解していない」(C: 117 - 118 頁)とする経済同友会幹事の北城格太郎の判決批判に代表される経営者の批判である。企業の研究技術者も労働者であることに変わりはない。そうであるならば、マルクス流にいうと労働力は現実に労働する以前に購入されているのが本質であるから、そこからいくら多くの利潤が生み出されようと、それは資本側の取り分となるはずである。現代の日本の経営者はマルクスの労働力理論の立場には立たないであろうから、「多くの社員の努力」および「経営者の判断」を指摘し、中村個人の取り分が多すぎると批判したものである。しかし、「多くの社員の努力」に見合うように、青色発光ダイオードの開発から得られた利潤は自発的に配分されるであろうか。例えば一時金がいくらか上乗せされることはあろうが、そこから得られた利潤を「努力した社員」の努力に相当する金額で還元されることは考えにくい。そこには経営者側に「労働力の相場」意識が存在しているからであろう。これはある意味でマルクスの労働力理論の射程の正しさを示していると解釈できよう。そうであるならば、発明によって得られた利益の大半は「リスクを冒してプロジェクトを遂行」した経営側に属するべきであるというのがその主張となろう^⑩。ここではもちろん、中村の労働力を購入したのは経営側であるから、かれが労働過程で生み出した利益は経営側に属するという論理が取られているのではなく、あくまでも経営側の「業績」が大きいのに、判決はそれを無視しているという論理が取られていることに注目したい。

次に、中村と同じ立場である研究者・技術者の反応は必ずしも中村への共感ではないという(C: 118 頁)。かれらの多くは、組織内で会社の業務として働いているので、特許をとれたとしても自分一人の業績に帰することはしない場合が多い。ただし同じ職種の人間であるから中村個人への直接的批判の形は取らず、かれの特許の過小評価あるいは、リスクのある研究を許した経営者の貢献を高く評価する傾向があるという。西村はこれを組織の一員として自己主

張を抑えて働かざるを得ない技術者が、「技術者としての決定的瞬間に決定的に自己を主張しえた中村修二への羨望と反感が交錯」した「ねたみ」としてとらえている（C：120頁）。

西村は、ほとんどの日本人から中村修二は嫌われているとし、その根拠をみんなの協力で仕事は成功したはずなのに、自己の成果を主張する点、「技術者のくせに仕事をカネで評価する態度」に求めている（C：140頁）。一般に職人的な仕事は仕事への没頭が優先されるべきであり、そのこととその成果が貨幣でいくりに相当するか考えることは相容れないものとみなされているからであろう。誰でも稼ぐ金は多い方がよいであろう。そして、現在では著名な芸術家やスポーツ選手はそれほど金銭的な自己主張をしなくても多額の貨幣を得ることが保障されるようになって⁶⁾いる。中村の場合は、かれらほどの「自由度」があるとはみなされておらず、その貢献が企業の売りにどれほど大きいものであろうと、「労働力の販売価格」を大きく超えることが一般の人々に違和感を生じさせるものと思われる。

おわりに

ジンメルは「私は労働力理論をきわめて興味あるものと考えたい」（A：456頁）として、労働価値説からの人格の値段の考察を試みている。そして、企業家が労働力をその生活手段の値段で働かせ、生産物がそれを上まわる剰余をもうけとするという剰余価値説を認めている。また、西村は「リプレサブル（代替可能）」な労働に関しては労働市場で決まっている妥当な報酬を払うべきであるとして、個人の業績に見合う金額のための特別な計算の必要性を認めていない（C：180頁）。

以上を踏まえると、ギャンブルのような偶然性により運良く多額の貨幣を獲得する方法以外で、合法的に大金を得る条件は以下になるであろう。これまでの議論を振り返る形で整理してみよう。これが労働価値説の呪縛から逃れ、労働力の再生産に必要な貨幣を超えて高額の貨幣を得る抜け道であろう。

まず、秀でた芸術家になってその作品を大富豪に購入してもらおう。これは、絵画のようにその作品を万人が購入することが不可能な場合である。

第二の方法は、著名な指揮者のように一定数以上の聴衆を集め、その集積された入場料から一定の報酬を得る方法である。第一の方法よりもこれはより「民主化」が進んだ方法である。しかし、聴衆はコンサートホールに集まる以外にも存在しうる。つまり、複製された音楽（レコード、CD等）を広く一般に販売できれば、獲得できる金額は原則として無制限となる。これはさらに「民主化」が進化した形態である。

第三は、会社に雇用されていても特許を取り、その販売額に応じた貨幣を獲得する方法である。この金額も基本的に無制限である。

最後の方法が、他者の労働力を購入し、それを使用した結果発生した商品を販売して貨幣を獲得する資本主義固有の方法である。この金額も基本的に無制限である。ただし、これは労働価値説を利用し、自らの特権的にその外側に置くことによってなりたつ方法である。

しかし、これらのいずれもが万人が接近可能であるわけではないことが問題である。

註

- ① G.ジンメル『貨幣の哲学』居安正訳、白水社、1999年 (Simmel,G.,1900,*Philosophie des Geldes*,Georg Simmel Gesamtausgabe,Bd.6,Suhrkamp,1989)。以下、同訳書をAで表す。
- ②交換の媒介としての能力を増大させることによって、貨幣は「現代の神」となりうるけれど、この「神」自体は無色・無性格の「神」である。
- ③ K.マルクス『資本論』資本論翻訳委員会訳、新日本出版社、1997年 (Marx,Karl.,1867,*Das Kapital - Kritik der politischen Oekonomie -*)。以下、同訳書をB I aで表す (I aは第1巻のaの意)。
- ④マルクスは、商品 A = 商品 B という「簡単な価値形態」から出発し、いくつかの段階を経て貨幣形態を導き出した。商品の値段というからには、商品 A = 一定量の貨幣 = 商品 B となるべきであるが、貨幣という媒介項を省略すれば、「簡単な価値形態」へと戻ることができる。
- ⑤もちろん、「抽象的人間的労働」は「具体的有用的労働」を抽象したものである。
- ⑥「ある使用価値の価値の大きさを規定するのは、社会的に必要な労働の分量、または、その使用価値の生産に社会的に必要な労働時間にほかならない」(B: I a67頁)。
- ⑦マルクスによれば労働力も商品であるから、その価値通りの値段で売られる。
- ⑧「金」の部分は、「貨幣」であるが、訳者註によると、カウツキー版、ロシア語版では「金」となっている。文脈から考えて、「貨幣」を「金」に置き換えても妥当であると判断した。
- ⑨形式を内容から分離し、形式の独自性に注目するのは、ジンメルの「形式社会学」の特徴である。
- ⑩西村肇『人の値段—考え方と計算—』講談社、2004年。以下、同書をCで表す。
- ⑪大野和士、大友直人らの「中堅一流」の値段は一公演あたり50万円から80万円といわれているが、かれらの実力が小澤の10分の1であるとはいえないであろう。西村も指摘しているように、国内では西欧諸国に比べてクラシック音楽の公演へ足を運ぶ人が相対的に少ないという市場の問題である。
- ⑫あれだけ高額な年俸をもらっていて何故まだお金に執着するのか、というのは一般人の抱く常識的な疑問である。高額であればあるほど希少性が高まり、自分のプライドに適合するものとなるのであろう。また、「正直な」子どもの「そんなにお金をもらって何に使うのですか」というテレビでのインタビューに、イチロー選手は言葉に詰まっていた。
- ⑬日亜化学が中村に8億4千万円支払うことで、2005年に和解が成立している。
- ⑭日亜化学経営者は、中村の貢献に対して「発明報奨金」として2万円を渡したのみであった。
- ⑮例えばプロ野球選手の場合では、前述した論理により選手の年俸が計算でき、それが同等の成績を上げる選手の相場を決定する。しかし、観客数の減少等によりその金額が支払われない場合には、選手は他球団に移るか、最悪の場合には球団の身売りとなるであろう。

The Price of a Person and His Achievement

OHSUGI Itaru

Abstract

Strong resistance exists in calculating persons in terms of money. The reason of this matter, according to G. Simmel, derives from the fact that money has increasingly lost its individuality and that a man has increased that of him. From Marxist' point of view, the price of man means that of his labor power, and this thought is based on the labor theory of value. On the other hand, we can find the phenomenon that some of men's achievements get a large sum of money. This paper tries to investigate the relation between money and a person.

【Key Words】 money, labor power, achievement